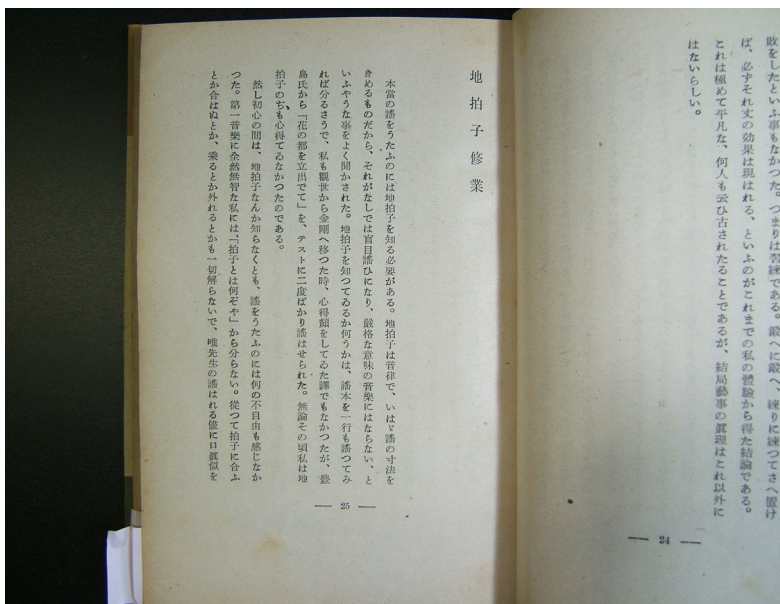


栗林貞一 『能謡新風』

素人の芸談であるが、最初の「謡十年」という部分は、謡学習者がどのようにして拍子にふれるようになるか、その段階を描いていて興味深い。また、平ノリの間についても貴重な観察がある。「幾文字不足か分らないのでなく、句の最初に置かれて引きを拵へる」(二七頁)、つまり、謡の間が、一句の最後に置かれているのではなく、句の最初に置かれているということである。なれば当たり前かもしれないが、これは音楽的には特殊である。そのことが、実感をもつて語られている。



標題 内題：—

標題紙：能謡新風

奥 附：能謡新風

その他：能謡新風(巻末・背・函)

著者 奥 附：栗林貞一

その他の場所：栗林貞一(標題紙・背・

函)、栗林生(序)

出版 版次：第一版

出版地：東京

出版社：謡曲界発行所

出版年：昭和15(1940)

その他の場所：—

形態 冊数：一冊十函 頁数：二八三頁

寸法：19×13 (cm)

状態 写本版本の別：版本 現物複写の別：現物

備考